

情報発信の強化へ

大阪市の市政改革

5/16(朝) 25頁

今年度の「中身難解」指摘うけ 活動方針案

大阪市は15日の市政改革推進会議で、市政改革の今年度の活動方針案を提示した。「市民や職員に市政改革の中身が分かりにくい」との反省に立ち、情報発信の強化を目指す。出席した同会議顧問で元三重県知事の北川正恭・早稲田大大学院教授は「市民の理解がない限り改革はできない。もう権力的な時代ではない」と指摘し、改革への市民参加の重要性を指摘した。

会議の中で、関淳一市長は市政改革マニフェストについて、「トップダウンで行ってきたが、末端まで（意識が）行き渡っていない」と振り返った。活動方針案で、教員や看護師、保健師、キーパーソンなど市民と接する機会が多い技術職員が技能を發揮しやすい職場環境作りに取り組むことを表明した。また、市民、議会、労働組合との対話を重視する。

一方、会議では水道局改革も取り上げられ、委員の森下俊二・NNT西日本社長が「古い浄水場の統廃合などを府のリーダーで検討すべき」と指摘。委員長の上山信一・慶応大教授も「知事や市長、国で総合的に考え、全国に先駆けた公水道を構築すべきだ」と述べた。

【堀川剛護】

読売

5/15(朝)

「ミスター改革」大阪市政に注文

北川正三知事「職員削減だけでは暗くなる」

大阪市の市政改革を外部から監視、助言する市政改革推進会議の顧問で、「ミスター改革」の異名を持つ北川正恭・早稲田大大学院教授が15日、市役所での同会議の会合に初出席した。

今年3月の発足後、2回目の会合。まず市側が「改革マニフェスト」を作成した昨年1年間の改革の進捗状況を報告した。前三重県知事で、マニフェスト導入の提唱者としても知られる北川氏は、「局長改革マニフェスト」に基づいて人員削減などを進める水道局を、「よくやられている。日本一の水道局を目指しては」と持ち上げる一方で、「職員削減だけでは暗くなる」と述べた。

大阪市政改革「愛も夢もなかった」

大阪市の市政改革推進会議が十五日開かれ、今後の市政改革に必要なのは「夢と愛と対話」とする報告書が提出された。トップダウンだけでなく、市職員の現場の声を取り入れる「愛」ある改革が必要という趣旨。だが、「これまでの市政改革には愛がなかった」という含みの内容に、現場からは「愛はほしいが、でも愛だけでは改革できるのか」と声があがっている。

会議では、市政改革の取り組み状況の分析や平成十八年度の活動方針について議論。市の不適切な行為の推進会議に報告書が中心で現場の職員にとって「愛」がない市民や労働組合、議会などの「対話」が不十分の三点があげられた。

改革本部は今後、労働組合との直接対話を増やすことや市の未来像を提示するビジョン策定などを進めることを確認。人員や予算の削減にとどまらない「希望の持てる改革」を目指すという。

大阪市政改革 前三重県知事が高評価

大阪市政改革のチェック・上山信一（慶応大教授）の「正恭・前三重県知事が機関として市が設けた市政改革推進会議（委員長 阪市役所であった。北川 席し、「コスト削減だけ」

現場の声反映要求

改革本部は今後、労働組合との直接対話を増やすことや市の未来像を提示するビジョン策定などを進めることを確認。人員や予算の削減にとどまらない「希望の持てる改革」を目指すという。

でなく、今後は市民や民間との連携、地域経営の観点が必要だ」などと助言した。

水道局から、職員約18%にあたる400人を5年で削減する計画の説明を受けた北川氏は、「よくやっている。歴史と技術力があり、計画が実現すれば日本一の水道管理局になる」と取り組みを評価。

三重県改革を振り返って「選挙管理委員会など、役所のすみずみまで改革の対象にしてほしい」と語った。